

ふるさと " 風 "

第四十九号 (二〇一〇年六月)

風に吹かれて (29)

白井啓治

『花は散ってこそその美しくあり』
『いかにあっても枯れることの美しくもなし』

今年の春の花たちにはどこか恋に躊躇っているかのように思えたのは、不安定な陽気の所為であったのだろうか。前日との温度差が十度、十五度なのだから躊躇いの笑顔しか作れなかったのは仕方のない事であろう。花の命そのものは例年より長いように思ったのだが、華やかさに欠け、満面の恋笑顔、とはいかなかったのだろう。花に誘われて忙しく働く蜜蜂達もさぞ戸惑ったことだろうと思う。そんな事を思いながら、「花は散るから美しいのだ」とおもってみたのであったが、すぐさま否定的な言葉が浮かんでしまい、散り枯れた花びらをみて何が美しいものか、と悪態を言葉にするのだった。

枯れるという言葉で直ぐに思いだされるのは、義姉(兄と呼んでいた従兄弟の奥さん)の事である。随分と可愛がられ、言いたいことをずけずけと言えり素的な女性であった。彼女に、義姉さんは美しく歳を重ね枯れていってくれ、の様な事を言った時、すかさず「枯れたら美しくないのよ。私は枯れないでボタンとあの世に行くんだから」と言われた。

義姉はその言葉通り、六十歳を過ぎるとこの世にさつさとさようならをしてしまった。以来、私は知った風に「美しく歳を重ね…」「美しく枯れて…」と気取ると、義姉に天から拳骨をもらった気分となり、それを直ぐに打ち消す言葉を言う様になった。「やっぱり萎れた花には華はない」と。

「だから！」

ことさら力んで強調することは無いのだが、何時も恋をして心に華をなくさないようにと思っている。

六月十八日から二十日までの三日間、ことば座の公演に合わせて「風の会展」を行う。風の会もいよいよ五年目に突入である。五年をクリアし、七年をクリアすれば、本物の月刊紙となるだろうと思っている。勿論、今だって本物であるが、ふるさと文化紙として広く認知される、という意味である。その為には、もう少し若い会員が集まってくれることが望まれる。

文章離れが言われて久しいが、実際には携帯メールだとか、ブログだとかで、一昔、二昔前よりも文章を書くことが多くなっている様に思う。同時に活字離れと言われるが、印刷本を買わなくなっただけの事。そんな風に私は思っているし、感じてもある。

風の会の人達とは良く話をするのであるが、文章に上手下手はありません。感動を与える文章と感動を与えない文章があるだけです。幼く稚拙と思われる表現であっても、感動を与えてくれる文章は沢山あります。反対に豊富な言葉をこれでもかと思つて書いても、無感動であつたり、卑猥で反吐が出る様な文章があります、と。

会員の打田兄とは良く話すのであるが、打田兄は、『文章を書くのが嫌だという人の気が知れない。文章を書き自分を表現できるのは人間としての特権なのだ。それを放棄して嫌いだという人は人間を放棄しているとは思えない』と仰られる。その言葉を受けて私は、『文章を書くことを嫌いにしたのは、馬鹿教師達で、自分でも解っていない上手下手の尺度を持ち込んだからだ』と声を荒げる。そしてついでに、『音楽を嫌にしたのは音楽教師、絵を嫌にしたのは美術教師、スポーツ嫌にしたのは体育教師』と言わせてもらおう。その理由は、尺度の無いものにまで、尺度することに何も疑問を持たないから。

しかし、そう言う私が脚本家という仕事を選ぶ最初のきっかけを作ってくれたのは、小学校の時に、「白井君、とっても良い詩だったよ」と褒めてくれた教師がいたからであった。褒めれば良いというものではないが、下らない尺度をあてて上手下手を言うよりは遙かに良いだろう。

それで、唐突の締めくくりであるが、打田兄の言われるがごとく、人間を放棄したくない人、ぜひこの「ふるさと風の会」にご参加ください。連絡をお待ちしております。

古代エジプト文明の風に吹かれて (3)

兼平ちえこ

当会報四十六号より、三月八日〜十五日エジプト周遊八日間の旅をお伝えしております。3回目の今回は古代エジプト時代に上(カミ)エジプトの首都テーベとしてファラオの時代に最も輝きを放ったエジプト屈指の古都、現在のルクソールから出発いたします。

古代エジプト時代の首都テーベには歴代のファラオが埋葬された王家の谷やエジプト最大の神殿が建ち最盛期には百万人も人口を誇ったという現在のルクソールはその王家の谷やエジプト最大の神殿を目指して世界中から人が訪れる国際観光都市になっている。

町はナイル川をはさんで東西に二分され、東側は古代にも「生者の都」と呼ばれていたように、ホテルやレストラン、商店が立ち並び街路にはきらびやかな馬車が闊歩し、夕暮れになるとナイルの日没を眺めようと川沿いの遊歩道を歩く人も多いという。

朝早くの出発だったので、きらびやかな馬車やナイル川の夕日を見ることができず残念であった。中心部には華麗なルクソール神殿、やや離れた所にはエジプト最大の神殿カルナックがある。

一方西側は「死者の都(ネクロポリス)」と呼ばれ死者が埋葬された場所である。王の再生復活の祈りをこめた葬祭殿も多数建築されている。東西まさに遺跡のオンパレードといったところである。まず私達は西側に向かう。

西岸の遺跡の入口にあるメムノンの巨像は紀元前一三八八〜紀元前一三五一まで在位の王、アメ

ンヘテプ三世の葬祭殿前にあった石像であった。左右の像のうち、右側の像が地震でひび割れし夜明けに音を発するようになったため、ギリシャ神話の曙の女神の息子メムノンと結び付けられたという。しかし修復後は夜明けの音は聞こえなくなつたそうである。

巨像の大きさは鎌倉大仏位の高さであっただろうか。小高い赤褐色の丘を背に腰掛けの状態で悠然としていた。

次は、いよいよファラオ達が永遠の眠りにつく“死者の町”へ。そこには王家の谷と王妃の谷そして貴族の墓が広がる。途中、早稲田大エジプト調査隊研究所を車窓より写真におさめる。

王家の谷はピラミッドの形をしたエルクルン山のふもとに位置し、入口が狭く盗掘から守り易いところからファラオの墓所に選ばれたという。全部で六三の墓が発見されており、発見の順に墓番号がついているそうである。

ツタンカーメンは六二番目に一九二二年考古学者、ハワード・カーターによって発見され、世界を震撼させた。

見学の私達はトロツコで移動。正面には、ピラミッド形のエルクルン山が赤褐色の岩肌で穏やかに迎えてくれた。両側はなだらかな幾つもの峰が連なっている。墓所とは思えない、肌色の山あいには優しさが感じられた。

専門の盗掘団によって殆どの王の墓が荒らされた中でツタンカーメン王の墓は、自然的な地形や歴代のファラオの名を記した、王名表からも消され存在すら忘れられていた等から盗掘を免れていらした。

見学者の流れに乗ってファラオと神神を描いた

美しいレリーフや壁画を見ながら奥へ進む。

金箔の貼られた四つの巨大な厨子等副葬品が置かれた各部屋はガランと、岩の壁を見せてくれた。果たしてツタンカーメンのミイラは…、ガラス張りの中に、白い布を覆い両足のつま先を上にして顔は天井をおおぎ静かに永遠の眠りの中にいた。足、顔面もエジプト考古学博物館で見たミイラのように鉄の塊のようではあったが痛痛しさは感じられなく、寝息も聞こえてきそうな安らかに横たわっていた。静かに手を合わせ見学者の流れに戻る。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会もお陰様で五年目に入りました。当会では、ふるさと
の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。
自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢
をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、
月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。
会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費として)
入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

歴史から消し去られた少年王の姿が消えぬままにハトシエプスト女王葬祭殿に向かう。

葬祭殿はフアラオが亡くなった時、葬儀がとり行われたとされ、王の再生、復活を願った重厚な造りとなっているのが特徴であるという。

ハトシエプスト女王葬祭殿は崖を利用した三階建ての葬祭殿で秀麗な姿から、とりわけ神聖なものとして称えられていた。そして、ここは数年前にテロによる銃撃戦で日本人の犠牲者も出た所であった。…合掌。

葬祭殿は柱や壁いっばいに南方の国、プントとの交易図やハトシエプストの誕生伝説などのレリーフや壁画が見事であった。

ツタンカーメンの墓の壁画といい死者の人生を生き活きと伝える壁画と色彩の傑作に出会える墓所めぐり、といったところであるが、まさに野外絵古文書である。(と言いたい) 勿論、壁画、レリーフの傑作は、これから見学の東岸に広がる神殿にもフアラオの祭りごとやその当時の暮しの様子が刻みこまれている。

カルナック神殿をはじめとして六ヶ所の神殿の巡りは次回といたします。

- ・ボタン去って シャクナゲ去り
- ・楚々として藪草

・風の染めた 八郷のさと

ちえこ

予科練平和記念館

小林幸枝

今年二月、阿見町に予科練平和記念館がオープンしたことを知り、行ってきました。

予科練という言葉は知っていましたが、予科練というのはどういうものだったのかということとは正確には知りません。霞ヶ浦飛行場があったのだから関係する兵学校なんだな、といった程度のものでした。これは私だけではなく戦後の高度成長期以降に生まれた者達の殆どは、実体の知らない言葉だけのものと言えます。

それで、記念館のオープンを知り、とにかく行ってみることにしたのでした。

出かけて先ずビックリしたのは、予科練記念館とはいいなながら、美術館と見間違えほどモダンな建物に迎えられた事でした。場所を間違えた、と本当に思ってしまった。

中に入り、建物のコンセプトを読んでもみると、空をみせることを大切に考え、変わらぬ空の風景から、当時の少年たちの気持ちや現在の平和な世界のことを考えてもらいたい、との考えに基づいて設計された、とありました。

案内書に書かれている予科練とはどういうものかを読んでみると、「予科練」とは「海軍飛行予科練習生、およびその制度」の略称で、第一次世界大戦以降、航空機の需要が世界的に高まり、欧米の列強に遅れないようにと旧海軍が、若いうちから基礎訓練を行い、熟練の搭乗員を大勢育てようと、昭和五年から開始されました。14歳から17歳までの少年を全国から選抜し、搭乗員としての基礎訓練が行われ、昭和20年の終戦までの15年間に約24万人が入隊し、そのうち2万4千人が飛行

練習生過程を経て戦地に赴きました。特攻隊として出撃した者も多く、戦死者は1万9千人にのぼりました。

館内には写真家の土門拳撮った写真が展示されていますが、士気を鼓舞する写真の裏に、戦争の悲劇がみえ、平和ボケして士気の鼓舞をかつこい何て思わないで、二度と悲劇を繰り返さないようにしなければいけないと改めて思った。

ギター文化館

2010 CONCERT SERIES

今年はギター文化館が開設して18年になります。本年も魅力いっぱいのコンサート・シリーズを予定しております。

6月13日(日) PM3:00~高橋竹童津軽三味線のひびき

7月4日(日) PM3:00~大萩康司ギターリサイタル

7月25日(日) PM3:00~小川由美子&森万由美オカリナとアルバのコンサート

7月31日(日) PM3:00~SONOROSA と仲間たち

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

「人間の本性」などと、大袈裟なテーマを掲げ、3か月間、色々な角度から検討を加えた。プロの哲学者じゃないのだから…ということもあり、系統立った論理構成も起承転結もありはしない。そのつど、思いつくまま、蛮声を張り上げ、人間の本性に迫ろうとした。今月はその総集編。

基本的な態度は、人類にあらゆる行動を起こさせる深層心理は、長かった野生時代にその起源が存在すると私は考える。しかし今、人類の野生時代の様子を直接観察はできないから、動物行動学からヒントを得て、人類の過去を類推するほかない。その結果、私の結論は、人類も自然界の生物の一構成員にすぎない。人類は特別に優れた、超自然的な存在などでは決してないということ。

人間の本性は、決して、神に近い慈愛に満ちた、清廉なものとは言えない。愛憎激しく常軌を逸した行動を平然と行う。我欲が強く、窃盗・強盗・強姦・殺人などのニュースは無尽蔵。国家など組織としては「略奪・侵略」こそ、世界史の醜いキーワード。強欲な大王や大国は、小国をいとも簡単にひねりつぶす。弱肉強食は正に人間の本質なのであろう。

生命誕生以来、微生物から、多細胞生物へと進化し、ついに脊椎動物→哺乳類→人類へと歩んできたのだから、周りの命を奪い、己の栄養としなければ、自分も子孫も生き残れなかったのは、他の生き物達と、なんら変わるところはない。それが生き物の本質であり、人間だけが殺生を拒み「霞」を食べて生きていけるわけがない。

さて人類は、進化の過程で他の動物よりチョットだけ知能が進み、ここ一万年ほどで、ささやかなが

ら文明とやらを築き上げた。それにより経度ならば自然災害・気候変動・疫病・食糧危機などある程度クリアーできたかもしれない。しかしそんなモノは、ほんの些事にすぎない。巨大隕石落下・小惑星の地球軌道近辺通過による地軸のブレからくる、超氷河期又は超温暖化・スーパーブルーム(マグマの同時多発大噴出)。そして最悪は、温暖化→砂漠化→植物減少による酸素産生量減少→全地球的な「酸欠」などで、過去全生物の90%前後が絶滅した事が5回もあった。その6回目を、人類の欲望が創り出した温暖化により、自ら招くことになるかも知れない。

金星の気は、CO₂ 95%、地表温462℃だが、明星と輝いていても死の星である。人類は、物質文明の長足な進歩という強欲のために、環境破壊・資源枯渇をきたし、死の星への道を歩んではならない。

地球温暖化は、低地の浸水など序の口で、中高緯度地帯でもマラリア・黄熱病など熱帯病が蔓延し、更に、熱帯に棲む猛毒のサソリ・毒グモなどの他、毒蛇などが日本辺りでも棲息可能。そして究極は、アフリカ原発で人間の致死率88%のエボラ出血熱など蔓延しようものなら、現生人類も、たちまち過去の化石人類となっていく。温暖化は、水中や空気中の酸素濃度が希薄になるということだ。

それゆえ、やれ霊長類です…哺乳類です…脊椎のある高等動物です…などと言って威張っていても、目糞が鼻糞を笑うようなもので、単細胞の微生物の方がはるかに、したたかに生き延びるであろう。或いはゴキブリにさえ、かつて哀れな生き物が地上を制覇していたらしい…などと蔑まれるかもしれない。

【人類の滅亡に関し、私には一つの考えがある。先日オバマ米国大統領は、次は火星に人類を送ると宣言した。生命の痕跡を探すためらしい。結論を先

に言えば、そこまでやるのか?…ということ。

現在の人類の知識で分かっていることは、①ビッグバン以来、宇宙は137億年経っている。②宇宙には1000億個の銀河が存在する。③その一つ我々の天の川銀河には1000億個の恒星がある。④その恒星系の中には100万個ぐらゐの「生命が存在しうる惑星」が有りうる。(太陽と地球のような関係で、距離・質量・元素構成などほぼ同じ。水と空気があり、年平均気温15℃ぐらゐ。生命誕生38億年で文明達成)⑤100万个も生命が存在しうる惑星があるのならば、地球より100万年ぐらゐ文明が先行し、知的生物のいる星もあるはず。⑥しかしナサの発表によれば、地球外から、人工的な電波は一切傍受できない。高度文明なら星間移動は可能。通信には、必ず電波を使うはず。

⑦それが来ないということは、文明が最高度に進化すれば、他の惑星に進出するなど愚かな行為は自制するか、さもなければ地球人みたいに、環境破壊や、資源枯渇などで、知的生物は滅亡するかとちらかた。

「知的自制」か「知的暴走死」かのどちらかだ。おそらく、生まれた母星を離れるほどに文明が発達する頃には、「種の寿命」が尽きるというのが、宇宙での通例なのであろう。奢れるものは未来永劫に栄えることはあり得ない。オバマさん、生命起源の探求は必要だ。しかし、火星に行くより、全人類が飢餓や、癌・疫病などから救われ、戦争のない世界を創る方が先じゃやごさいませんか?と私は言いたい。】

(そして、2010年4月25日、天体物理学者ホーキング博士はアメリカのテレビ番組で『人類はエイリアンとコンタクトすべきではない』と述べたという。理由は、コロンブスがアメリカ大陸に到達したために、先住民にとって良くない結果をもたらした。自らの資源を使い果たした宇宙人は、新しい移住先を

求めて、きつとやって来る…とも述べた。

私はマゼランやキャプテンクックの業績は高く評価するが、その根底にあったものは、未開地の侵略や略奪的な貿易にあったことは残念でならない。先進諸国が未開諸国を侵略した世界史を振り返り、私は今まで何遍も怒りの言葉を述べてきた。人類のあまりにも急速な文明進化は、資源枯渇・環境破壊を招き、人類滅亡を早めるだけだ…。スローライフこそ、今、最も重要と何遍も述べてきた。今回ホーキング博士の話は、正に我が意を得たりの感がある。

さて自然災害による環境激変の前には、人類は風前の灯火で、生き物として根本的に、他の生物とも違ふところがない。(7万年前、アフリカを飛び出した現生人類の祖先は、インドネシアの火山噴火で、滅亡寸前まで追いやられた。)チットヤソットの文明進化ぐらいで、宇宙規模のハザードと言わないまでも、近々にありそうな巨大地震や火山噴火、超悪性のパンデミック(世界的流行病)などでさえ、現在の人類の智慧(国連の統率力)では、何の対応も出来そうにない。事実2011年4月、アイスランドの小規模噴火でさえ、航空関係の混乱ぶりは、いかに物質文明が、ひ弱なものが証明された。

この程度の小規模ハザードでさえ、大騒ぎしたのに、愚かにも、無節操な物質文明により、地球温暖化の自殺行為は、ただただ種の寿命の短縮化に拍車をかける愚行と言える。有頂天になって、この地球を汚染していく人類の脳味噌は、何のために今日の肥大化を招いたのか? 自らをコントロールできない暴走する大脳。もし人類に智慧というものがあるのなら、そろそろこの辺で国連などがしつかりと、強い指導力を発揮し、強権発動で環境汚染など暴走に歯止めをかけるべきだ。文明のスピードをスロー

ダウンすること。それしかない。先のCOP15など、小さな井戸の中で、蛙どもが罵り合っている感が非常に強かった。その点、社会性の昆虫や、群れ行動をする野生動物には、自らを律する、スーパー生存術が、はつきりと見られる。

その代表はミツバチだが、これも家畜伝染病予防法の守備範囲なので、私は長年「腐蛆(ふそ)病」検査を実施してきた。ミツバチは、幾何学模様の、極めて機能的な「巣」を作り、子を育て、食糧を蓄える。蜜源が豊富で、病気などもなく蜂群が巨大になると、女王は一族郎党を引き連れ、娘に本家を譲り、自ら分封(分蜂)する。ミツバチは極めて機能的な分業を行う。女王は1〜3年の寿命で産卵専門。オス蜂はただ交尾あるのみ。それが終わればすぐ死ぬ。働き蜂は、採蜜の最盛期は6週間ぐらいで死ぬ。越冬期には数か月生きる。働き蜂は成長過程で、ハウスの掃除係、育児係、巣作り係などを経て、採蜜や戦闘要員となる。斥候兵が蜜源を発見すると、巣に戻り、8の字ダンスを踊り、巣からの距離・方向(太陽との角度)などを仲間伝える。

【なお女王蜂は、数日間に6匹以上のオス蜂と交わり、腹部の受精嚢に一生、産卵する分の精子を蓄える。受精卵はメスとなり、ロイヤルゼリーだけで育てば女王となり、2日間だけしか与えられなければ働き蜂となる。未受精卵はオスとなる。女王は、1日に1500個も卵を産むが、その重量は自分の体重とほぼ同じ。働き蜂は逆力ギのある針で動物などを刺すので、抜けないため腹部が千切れてすぐ死ぬ。オス蜂は針がないので身を守るすべがない。交尾は飛翔しながら空中で行われるが、終わればオスはすぐ死ぬ。なお、交尾期ではないオスは、冬が近づけば、働き蜂により巣から追い出され、間もなく

哀れな死を迎える。】

オスが哀れな存在であることは他の動物でもしばしば見られる。カマキリはその最たるもので、交尾が終われば、すぐメスにより食われてしまう。

日本にも生息する、タマシギのオスも哀れな存在。タマシギは一妻多夫で、オスは体が小さく、ひとりで巣を作り、抱卵し、子育てをする。その間メスは、他のオスを選び好みしながら、第2・第3…と夫を作り、卵を産みつけるだけ。ツバメのメスも旦那に巣を守らせ、セッセと不倫。世の中にはヒマな学者もいたもので、ツバメの親子のDNA鑑定をしたところ、6羽の子のうち2羽のみが夫の子であり、あとの4羽は、それぞれ他の4羽のオスの子であったという(という事は、夫も妻同様、不倫をするという事)。これくらい多様性を求めないと、ツバメは何千kmもの渡りが出る、強い子が残らないのである。更に百獣の王ライオンのメスは、1発情期に100回近くも色々なオスと交尾をするという。王は、威厳を保つてはいるが、コソドロみたいな、はぐれ若オスに、マンマと女房を寝取られている。

【結婚式で「鴛鴦(えんおう)の契り」などと祝辞を送るが、とんでもない話。オシドリは、妻が他のオスと交わるため、飛び立とうとするのを、逃げられまいとして、夫がしつこく付きまとっているのが真実。2羽寄り添っているが仲が良いわけではない。1発情期に、多数のオスと交わり精液をミックスし、競争させ、先に輸卵管を登りきった精子が、栄冠を勝ち取る。これが生き物の本当の姿。従って(人類も含め)DNAの多様性を求めての「不倫」は、私の造語だが「正倫」いや「聖倫」とさえ書き改めるべきである。子孫繁栄の源なのだから、「聖倫」は不可欠の要素なのであろう。良心の呵責に苦しむ

…などはドラマ上の話。人類も当然、こうして乱婚の上に、今日の繁栄の基礎を築いたと思われる。」

そして、深海に棲むチョウチンアンコウのオスはメスの10分の1の大きさ。オスは巨大なメスの腹の皮膚に血管融合して寄生し、栄養をもらい、必要な時に交尾をするだけ。もつとひどい話は、ギンブナである。関東地方に生息するギンブナは、全くオスのいない「雌性生殖」で子孫を残す。染色体は他の地方の正常な2倍体に対し、3倍体・稀に4倍体で、他の魚種の精子でも受精し、卵は正常に発育する(但しこの場合、卵の核と融合することはない)。

このように、オスという存在は、繁殖において、単なる種付け役で、付属物的存在の感もある。何といても子孫を残す原動力はメスにある。

人間の男は、女より身長が平均6%高く、体重は17%重い。男は通常、腕力・瞬発力は強いが、生命力等、色々の面で女の方が強い。子孫を残す主導権は女性の方が握っており、男は婚活で選に漏れたり、みじめに、虐げられている例がかなり見られる。そのような生物学的生態が、その動物の根本行動を決め、本性となっているのであろう。

ミツバチの話など、人間の本性と関係なさそうだが、そうではない。共通点は多々見える。大体オスというものは、あまりにも消耗品的ではありませんか？ システムとして、江戸幕府でも將軍様は、なんかしら使い捨ての、血統維持のための…、これ以上言わなくとも、賢明な読者はピンと来るでしょう。

欲張りな大王は古来、なお勢力を広めようとして、領民を消耗品の如く戦争に駆り立て、累々と死体の山を築く。生き物として、システム化した社会では、こんなことは普通に見られる。人類に特別の「仁」や「徳」があるのならば、世界各地で見られた大き

な戦争や大量虐殺など、起こりつこないはず。

さて、野生の動物たちも、若オスは群れから追い出される。近親交配を避けるため、流浪の旅を重ねた末、いずれかの群れに殴り込みをかけ、王を倒し、新しい血を吹き込み、群れの活性化を図る。子孫を残せずに死にゆくオスがいかにも多いことか。

この点は、人類も智慧がないとばかりも言えない。法律など破られるためにあるようなものだが、一応、一夫一妻制度などを(日本では明治維新で法制化)編み出し、非力でも一応、誰でも平等に、妻を持ち、子孫を設けるシステムを発明したのだから…。それでも強欲な者は、人の妻を掠め取る。

所詮人類は、乱婚型の動物である。そうであったからこそ、今日の繁栄をもたらしたのであろう。綺麗ごとばかり言ったら、遺伝子の更新が行われず、衰亡の道を歩んでいたに違いない。「精液のミックス」これが生殖の原理だ。不道德なことを言うなど、怒られそうだが、これが人類の歩んできた真実の姿だ。わずか1万年の文明や、その結果できたザル法など、何の力もない。いつの世も、強欲なものが、世にはばかる。弱肉強食・それが人間の本性だ。

品格のないことを言うな、人間はもつと高尚なものだ…などと言われるかもしれないが、「雑種強勢」が無かったら、種は栄えない。どこか離れ小島の小さな集団で、他との交流は一切ない中で世代を重ねていったら、ちょっとした気候変動やら栄養の傾きでタチマチ子孫は絶えていく。劣性遺伝子が重複したら、一溜まりもない。子供の出来が思うようではなかったら、さつさとパートナーチェンジ。子孫繁栄はこれしかない。但し子供の出来が良くない原因の半分は、自分にあることもお忘れなく……。

さて、人間の男は女性より、(日本では)約7歳も

平均寿命が短い。その根拠は、男性ホルモンは高血圧・動脈硬化など、悪作用が強く(女性ホルモンはその逆)、全世界で男性は女性より早死に傾向がみられる。それに加え、最近の研究によれば、野生動物では、祖母は、しなびたオッパイをしやぶらせながら孫育てに重要な役割を占める。しかし祖父は、豊富な知識・経験など有るにもかかわらず、言葉は悪いが穀潰しで、群れから疎まれる傾向がある。そんな訳で長年の種としての行動様式が、定着し、遺伝的にも女性は長生きするように進化を遂げたらしい。

さて人類はあまりにも長い時間を「戦い」に費やしてきた。洋の東西を問わず、時代の新旧を問わず、しかも武器や戦略は後ほど高度化していく。もう少し穏やかに、皆が仲良く、理性や寛容が支配する、極楽浄土に近づけないのか？ 文明が栄えるとは、そういうことではないのか。片や軍縮の旗を振りかざす者あれば、世界に武器を売りさばく死の商人がその旗を引きずり落とす。そして、地球規模で、資源があるが無かるうが、浪費を重ね、枯渇を招く。食糧管理も国連など機能しない。至る所、貧富の差が生じ、永遠に争いが絶えない。

現代人は、至る所に野生本能丸出しで正に弱肉強食。奪い合つて己や子孫の命を繋ごうとする。DNAの命じるままに行動をする。長い野生時代に鍛えた根性は、簡単には萎えない。一万年ぐらいの浅い文明では、人は温和な生物に変身などできない。慈愛や博愛など人は願望を持つが、凶悪な略奪行動は後を絶たない。人の心には、仏もいるが鬼も棲む。それが人間の本性だ。要はバランスの問題である。

ちょうど一年前のことである。あの日のことは、今も確りと覚えていて。感動の余り、文章に綴ったりもしてみた。

それは留守番を頼まれた時の事である。広い屋敷に二日と一晚一人で居ることになった。私を頼ってくれることが嬉しいし、信用されているというこの喜びが大きかった。実家に泊まることは、母のお通夜の晩以来だった。応援に来てくれた妹とひとつきりお喋りをしていた。

話題は楽しい話より心配な話が多かった。今青いシートを被っているのは本堂、五〇七年という時間を掛けて建立されている。経済的にも苦しい時の寄付協力の難しさ、檀家とか菩提寺への思い方の違い、死に対する価値観の変化、等からくる問題が沢山ある。日常生活の中で寺との係わりが少ないから理解し合うことが難しいのだろうか。今何毎経済的判断が先行していくことで食い違いが多いのじゃなかるうか。又寺側の今という時期を逃せない判断もあったのだろうか、いそぎすぎるといふ批判等と纏まることのない話が続いた。十時になると夜回りに出かけた。外に出ると暗の世界だ。空には黒雲が全体を覆っていてそれ等が流れていた。今二人で話していた重苦しい気持ちの様な空だ。黒い群雲の間から月が僅かに見え隠れしている。丸で「希望」は遠い遠い果てにあって、そこへはなかなか届かない現実の苦痛を表現する様な状態だった。でも暗雲はどんどん動いている。何時かは飛んでいって「希望」としての月を見ることが出来るだろうか。そんな思いで境内、墓地、塚の上、園庭そして建物の回りを歩い

て行った。

「悪いことをしようとしている人はいませんね」

「大丈夫です」

と大声で言いながら歩いた。

何事もなく戻って来た。今度は少しでも楽しい話しをしようと、どちらから言い出した訳でもないが、再興当時の祖父母の苦労話や懐かしい父母の思い出等話した。合いたい、子供の頃に戻りたいと恋しくなった。その時、

「みんなで力合わせてやっていってな」

「助けてあげてね」

と父母の声がした様な気がして佛壇の方を見た。が居る筈もない。お線香をあげてお詣りして答えた。

妹は帰って行った。後姿を見送りながら、実家への思いを共有出来る事の幸せを感じた。明るさを感じて空を見ると黒い雲はすっかりなくなっていた。薄い白い雲が空を覆い飛んでいる。果てしなく次々に東から西へ飛んでいく。レースの様な白い雲の向こうに月が光っていた。

ふるさと風の文庫

新刊

- ◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(国分寺余話) (1000円)
- ◎小林幸枝「風に舞う」(2) (定価: 500円)
- ◎白井啓治「ふるさとの風に吹かれて」 (定価: 1000円)
- ◎兼平ちえこ「風のことば」(2) (定価: 500円)

- 伊東弓子作 「風のかげ」 (定価: 400円)
- 打田昇三: ふるさと「風にたずねて」(I・II・III・IV・V・VI)
(定価: 1000円)
- 菅原茂美第一作「遥かなる旅路」(1)(2) (定価: 500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!

- ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

- 兼平ちえこ「風に押されて」 (定価500円)
- 小林 幸枝「風に舞う」 (定価500円)
- 白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組: 800円)
- 近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組: 800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館: 0299-46-2457

・いしおか補聴器: 0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡 13979-2 (白井方)

電話 0299-24-2063

二度目の夜回りをして歩いた。前とは違って月の御蔭か夜の景色にも色彩のあることに気がついた。すると胸が弾んだ。誰かに会えそうな気がした。そうだ、この寺の歴史をつくってきた人達や住職は何所に居るんだろう。その時代、時代にこの地域の人達は寺にどんな風に心を寄せて来たのだろう。住職は地域の人達とどう向い合ってきたのだろう。寺を維持する為にどんなにか力を注いで来た事だろう。浮かんでくる思いを膨らませてみた。顔形、姿もさまざま、気性もいろいろ、力量にも差があったろうな。泣いたり笑ったり怒ったりしながら生きてきたんだろうに。今、名前が文章や石に刻まれている人はごく少なく、それ以上何も残っていない人の方が多いことを思うと切ない。一人だけの力ではなくて多くの人の力に支えられてきたことをあらためて思った。私の力も何かの形で貸してあげなきゃと強く思いながら部屋に入った。私の後を沢山の人達が附いて来た様な気がする。それは歴史を紡いできた人達の力が私の背中に着いてきてくれているんだと気がついた。

まだまだ寝るのが勿体ない様な思いで本堂を解体した時の資料を見てみた。建てられたのは三百年前の元禄時代であった事がわかった。当時の住職が当時の状況(藩の許しが出た)(資金ぐりの事)(檀家の協力)が整ったことが短い文で記されていた。その中から住職の苦勞と安堵の気持ちなどが伺えた。寄付をした人々の願いや思いも彫刻の一部に刻まれていた。「一つには親が長寿であることを感謝して寄贈するとあった」今以上に人の心の暖かさを感じる物だった。当時使用した材木、大工、職人達も寺の開山上人(良善上人)のおられた枳

木の芳賀郡の大沢からとれるされていた。長い年月を経て当時の人の姿が現れた。繋がっているのだった。

あと三、四年の暁には喜びの日がやってくる。現住職は今の世相とお檀家の寄せてくださった心を後世の人に伝える為に棟札と共に納めたと話してくれた。未来に生きる人達は現代の人の心をどう受けとってくれるだろう。出来上る日の待ちどしいこの建物は人々の心を豊かに育ててくれる場所であることを信じている。

前任職と現住職の話によると、今回の事業の為に使われた木の数だけは植えていくと聞いた。そうしてください。大地が崩れないように、又人の心が歪まないようにと願っていききたいからお願います。

眠る前に月に合ってからと思ひ、境内におりた。白い雲は全くななくなっていた。梅雨に入るこの時期には珍しい程の夜空だ。屋根を覆っているシートの青い色が空全体に反射している様な濃紺の中に十四日の月が光を放っていた。その光の中に前の時代を支えた人々の姿が見える様だった。外灯も消え、車の音もしないこの静けさだからこそ先人の声が聞こえるようだ。過去と現在の中に私も入っていた。この晩、三度見た空の大きさは力を、空の変化は豊かな感動を、月の光は生命をくれた。こんなひとときを与えてくれたことを感謝したい。さあ私の出来ること、それはこれだ。(協力していくことだ。未来に繋いでいく役だ)と決意した夜だった。

興亡の連鎖(その一)

打田昇三

謀反への誘い

日本で「年号」の制度が始まったのは大化の改新により孝徳天皇が即位した「大化元年(六四五)」かららしいが「一世一元の詔」が出された明治以降は別にして一番長く続いた年号は室町時代初期の「應永(おうえい)年間」であり西暦一三九四年七月から一四二六年まで三十四年間もあった。

当時の朝廷は北朝の後小松天皇と稱光天皇であるが、政治の実権は山莊を買って金閣を造った室町幕府第三代將軍の足利義満(あしかがよしみつ)と、九歳で跡を継いだ第四代將軍・足利義持(よしもち)、息子の第五代・義量(よしかず)らを名義人とする取り巻きの有力武士団が握っていた。

尤も義量は未成年なのに大酒飲みで、義持が心配して將軍職を譲る条件に「禁酒」を命じたのだが従う筈も無く、應永三十二年には十九歳で死んでしまった。將軍の座には二年しか座っていない。

その年の二月から三十四年までは征夷大將軍空席のまま隠居していた前將軍の義持が政務をみていた。そのまま應永三十五年に続く予定だったが、重臣の赤松満祐(あかまつみつすけ)が領地問題で逆らう事件があったので、気分転換に「年号を変えろ」ことを思いついて「正長元年」に直した。しかし、これがいけなかった。正月気分が抜けかかる十八日に義持も四十三歳で死んでしまった。

將軍として独裁政治を目指し、父親の第三代將軍・義満の政策を否定し続けたり、中国大陸にあった「明(みん)国」の使者を追い返したり強気の政策を続けた義持は、重臣たちが意見を言うようになるとやる気を無くし、息子と同様に時には

深酒をするようになった。死因は正月の酒かと思つたのだが、正式な記録では太腿部に出来た腫れものをひつ掻いて破傷風に罹つたらしい。

これを知つた世間の連中は「…義嗣（よしつぐ）の祟り」だと噂した。義持は三代將軍正室が生んだ嫡男のだが、父の義満は次男の義嗣（よしつぐ）に將軍を継がせる意向だつたという。少年時代に凡庸だつた義持に比べて義嗣は利発な子であり、側室だつた生母を義満が寵愛していたこともあつて優利だつた。十中八、九、將軍になれるところを、幕府重職の斯波義將（しばよしまさ）が長男の義持を強く推したために実現しなかつた。

將軍になれない兄弟は原則的に有力な寺院などに安く払い下げられることになっており、四人の弟は仁和寺（にんなじ―光孝天皇造営）とか大覚寺（だいがくじ―龜山天皇院所）とか由緒正しい寺に送り込まれた。しかし義嗣は父親の義満がいつも側に置いていたので例外として官位を与えられ將軍の親族として扱われていた。その義嗣が、ある事件に関わつて自殺せざるを得なくなつた。應永二十五年のことである。自殺と言つても殺されたようなもので「死になさい！」と親切に軍勢を差し向けてくれたのは兄の義持であつた。

実は、その足利義嗣の死が石岡の歴史に大きな関わりがある：正確に言えば「石岡周辺にいた豪族たちの没落に重大な関わりがある」のだが六百年も前に居た豪族のことなど、**どうでも良い**と言われればその通りで、將軍の死を「祟りだ！」と噂して鬱憤を晴らした当時の庶民のように「地元で偉そうに威張つていた罰が当たつた」と言つて忘れてしまえばそれで済むかもしれない。

しかしながら、良く考えてみると現在の石岡市

が何となく**元気が無い**のは、古代の国府だつた此の地に連綿と続いてきた豪族が六百年前の事件によつて没落してしまつたことに遠因があるように思われてならない。そこで一つの歴史として当時のことを振り返つてみることにしたのである。

先ずは、冒頭に述べたように應永年間の最後に日本のトップに居た征夷大將軍が若死にし、政務を見ていた前將軍も**祟りで死んだ**後の幕府内から覗いてみることにする。不運とも自業自得とも言える足利義嗣が、希望しないのに自殺させられてから十年後のことである。幕府を運営する武將たちにとつて、偏屈でも呑べえでも名義人の將軍が不在となると次の將軍が必要になつてくる。

当時は「**下剋上**（げこくじょう）」が始まる時代であり、百数十年後には織田信長が登場して「將軍」などという肩書には目もくれず武力だけで天下統一を図るのだが、應永年間には未だ幕府の重臣である武將たちは何れも力不足のため「飾りの將軍」が欲しい。武將の実力を試すことになつた「**應仁の乱**」が始まるのも四十年先である。

胸に野望を抱きながら權威に頼らざるを得ない重臣たちは、次の將軍にする人物を誰にするかで相談を始めた。こういう場合の最有力候補だつた義嗣は早々と消えていたから、残る駒は坊主頭にされた団子四兄弟である。実は、義持が寝込んだ時に、気が効いた重臣がそれとなく「**後継者の話**」を切り出したのだが義嗣を死なせてしまつたことを悔いたのかどうか、前將軍の義持は「…どうせ俺が決めても重臣たちの思惑とは違つてくるであろうから、自分の独断で決めようとは思わない…」と言つて誰の名も挙げなかつた。

政権に関わつていた武將たちは、四人の小坊主

のうちから誰を將軍にするか相談を始めたのだが意見が合わない。正月過ぎのことで京都の商店街が福引の大売り出しをした後であつたが、誰かがそれを思い出して「籤引きにしよう」と言つた。

正長元年（一四二八）一月十八日、一度は不要とされた前々將軍の弟たち四人が商店街に呼ばれて鐘の音も賑やかに抽選会が行われた結果、栗田御所とも呼ばれる天台宗の名門・青蓮院門跡（しよれんいんもんぜき）に送りこまれていた義圓（ぎえん）が当選した。門跡というのは大寺院の格式を継承する役目があり皇族待遇を受けるので悪い仕事では無い。今さら「將軍になれ！」と言われても苦勞が目に見えているから断つた。しかし重臣たちは有無を言わず義圓を引き連れて幕府庁舎内に連れ込み、頭に毛生葉を振り掛け、法衣を脱がせて、無理やり室町幕府第六代將軍・足利義宣（あしかがよしのぶ）にしてしまつた。

一説では前々將軍・義持の意向は義圓にあつたのだが、後継者指名が混乱を招くと判断して形だけ抽選にした：つまり籤は最初から「義圓」に当るようになっていた：とも言われる。なぜ、そのような工作をしたのか：実は第五代將軍が在職僅か二年で急死したとき、そして第四代將軍が破傷風で命が危なくなつたとき、將軍の後継者として盛んに自分を売り込んだ人物がいたのである。

その名を足利持氏（あしかがもちうじ）と言う。室町幕府の出先機関として関東・東北を抑える「**関東管領**（かんとうかんれい）」の職にあり、將軍と同じく足利尊氏の血筋をひいている。その言い分は「…京都に將軍職を継ぐ人物が居なくなつた場合は鎌倉から出すのが筋ではないか…」というもので、確かに籤挽きで決める程度の將軍ならば鎌

倉に居て地域的だが政治の経験がある人物を昇格させても良いように思うが、足利持氏は將軍の義持に「自分を猶子（ゆうし）にするよう！」働き掛けをするなど幕府から嫌われていた。「猶子」というのは養子の一種であるが養子よりは名目だけのものが多い関係と思われる。持氏は將軍になる手段としてしつこく要求していたのである。

宝くじの売り込みと選挙の事前運動は当たらなければ何の意味もない。落選通知を受け取った持氏は先生はガツカリするのは慣れているが對抗馬が籤挽きで選ばれたと聞いて激怒した。そして第六代將軍となった足利義宣のことを「還俗將軍（げんぞくしようぐん）僧侶から俗人に戻った將軍」つまり、**意志を変えた人物**と呼んで馬鹿にした。秋になると鎌倉で明らかに幕府に反抗する態度を示し新將軍が年号を変えても従わなかった。

本来ならば京都から幕府の軍勢が押し掛けてくるところなのだが「イソップ物語」の「狼少年」と同じで、何度も反抗している持氏が少し騒いでも「またか！」と思われて相手にされないだけである。六年前に第五代將軍が決まったときにも謀反の兆しがあり幕府軍が動いた。すると持氏は慌てて「始末書」を書き、前將軍・義持に謝って勘弁して貰ったことがある。將軍になったばかりの義宣は、重臣たちから鎌倉の動きを聞いても暫くは放っておいたから、関東甲信越から東北にかけては同じ日本でも別な政治が行われていた。

「やはり還俗將軍は何も出来ない！」と持氏は高を括って勝手なことをしていただけだが、これが大きな見当違いで、足利義宣は名前を足利義教（あしかがよしのり）と変え、自分の政治を行うようになる。室町幕府歴代の將軍で最も厳しい人物

に変貌してしまった。幕府内でも、些細なことで何十人という公家・官僚から女官までが処罰されることが日常的となった。都の商人で「儲け過ぎた」と首を斬られる者まであったと言う。当然ながら、出先機関である鎌倉府の抵抗が許される筈はなく、永享十一年（一四三九）足利持氏は幕府軍に追討されて自殺し鎌倉府は滅びてしまった。

何処かの国の金持ち坊ちゃん議員のように政治が好きで政治が下手な後醍醐天皇が、鎌倉幕府・北条氏を倒して「建武の中興」と呼ばれた独裁的素人政治を始めたが上手くゆく筈も無く、呆れ返った足利尊氏が袂（たもと）を分かち諸国武士団の代表として「室町幕府」を開いた。

八幡太郎義家の子孫である足利尊氏は源氏ゆかりの鎌倉に本拠を置きたかったが、南朝の殘党が吉野に居たため止むを得ず京都北東部鴨川沿いの地に幕府を置いた。そこで有力なる東国武士団の要として次男・基氏を**関東管領**に配置していた。

この地位は將軍の下に置かれるのだが、抵抗する持氏は將軍の呼び名である**公方**を勝手に称して自分を「**鎌倉公方**」と呼ばせていた。これにより、鎌倉執事の上杉氏が昇格して「**関東管領**」になることになった。この、手前味噌の本舗のような野心家の足利持氏は基氏の曾孫に当る人物である。

その持氏がお騒がせな人生を終えて**あの世**へ行ったときには「：やつと来やがったか！待ち兼ねたぜ！」と言いながら、大勢の亡霊が手に手に棒きれを持って出迎えた。幽霊だから顔色が青くなければ不自然なのだが、怒っているから赤鬼のような顔をしている。その騒ぎを聞き付けた閻魔大王が宥めてくれたから叩かれずに済んだ。しかしそれから未来永劫、足利持氏はあの世の先輩たち

に苛められ泣きながら暮らしているであろう。

さて時代は室町幕府第四代將軍の実弟である足利義嗣が兄から自殺を強要された應永二十五年から数年前に遡る。その頃、現在の石岡市小幡近辺を領していたのは小田氏系の武將で越幡六郎信親（おばたろくろうのぶちか）という人物であった。

地方の武將たちは京都の將軍に忠誠を誓うことになるのだが東国の場合は中間に鎌倉の管領が居り、補佐役の上杉氏が居たから、先ず窓口のような上杉一族の誰かを親分に仰がなければならなかった。越幡六郎は四つに別れた上杉のうち屋敷を構えた地名から「犬懸（いぬかけ）家」と呼ばれる流派の上杉氏憲（うじのり）の部下という立場にあった。氏憲は出家入道して「上杉禅秀」と称していた。なお戦国時代に上杉謙信が継承したのは山内（やまのうち）上杉で、主君なのに智將・太田道灌を裏切ったのは扇谷（おおぎがやつ）上杉であり、詫間（たくま）家は早く絶えていた。藤原一族の末流である上杉氏は足利尊氏の母親・清子の兄たちが鎌倉府の補佐役とされたのが始まりで諸国守護を兼ねて権力を増したのである。

應永二十二年の春、常陸国小幡の住人・越幡六郎信親が「評定所」と呼ばれる鎌倉の裁判所から出頭命令を受け「公方の裁決である」として領地の没収を命じられた。「**二生（所）懸命**」の語源になっているように、武士が領地を失うことは最大の痛手であり屈辱である。どの様な罪で有ったのか？不思議なことにこの事件を伝える多くの史料は罪の内容を「**軽微な…**」としか記していない。馬に乗っていてスピードを出し過ぎたか、報告書の提出が少し遅れたか…ぐらいの些細なことであつたらう。本来ならば担当者から「注意を受ける」

程度で済む。公方が裁決するなど有り得ない。

報告を受けた上杉禅秀は管領（執事）の職にあつたので直ちに公方の許へ行き「越幡六郎の罪はさしたるものにあらず、お上がお裁きをなさる迄も無いことと存じます。所領没収とはあまりにも過酷なお仕置きですので、どうか私に免じて罪を軽減して頂きたい」と頼んだ。公方の持氏は怒りを顔に表すばかりで意見を聞こうともしない。禅秀の嘆願は度々に及んだが、持氏は許さず、四月二十五日には強制執行により、小幡領は鎌倉公方の領地にされてしまったのである。

五月二日、憤懣やるかたない上杉禅秀は「主君の無道を諫める職にある者が御無理御尤もで過ごしていたのでは執事の職に在っても意味が無い」として足利持氏に辞表を提出した。これを持氏は「自分に対する禅秀の面当て」と解釈して逆切れした。本来は政府高官の人事異動であるから一度は慰留し、或いは京都の幕府に了承を取らなければいけないのだが、京都が嫌いで自分が天下の主だと錯覚している持氏であるから、直ちに独断で代わりの人物を内定してしまつた。その人物が犬懸家の禅秀には「病氣」と称して屋敷に引き籠りつたから禅秀は「病氣」と称して屋敷に引き籠り密かに足利持氏に対する反抗を考えるに至つた。

「將軍になりたい病」に冒されて、あの世へ行つても評判が良くなかつた足利持氏は偏屈で独善的で名誉欲が強い人物であつたらしく、自分も京都の將軍に仕える立場であることが納得出来ず、常に不満を抱えていた。そして皮肉なことに持氏に仕える上杉禅秀は親分肌の武將で、越幡六郎や石岡に城を構えていた大掾満幹（たいじょうみつもと）など地方武士からも慕われる人物だつたの

で評判が良い。何よりも京都の將軍を立てているのが気に入らない。日頃から禅秀を替えてしまいたいと思つていたのである。そうした折に誰が言い出したのか「上杉禅秀殿が公方様の母上を犯した」と言う噂が広まつた。持氏は烈火のごとく憤り、軍勢を出して禅秀を襲わせようとしたが、側近が幕府への配慮からそれを宥めて、代りに禅秀の子分である越幡六郎の領地を没収したとす

に蘇つてきた。二人は庭の見える長廊下の陽溜りで、どうでも良い話をロマンチックに交わした。この様子を、持氏の取巻きが目撃したのであるが、声は聞こえないから「クダラナイ世間話」の内容が分からない。「お二人は仲が良さそうでした」と言う証言を付けて公方様に報告をした。禅秀にしてみれば、レストランの前を通つただけで「喰い逃げ」と言われたようなもので迷惑なことだが持氏は偽証を丸ごと信じて禅秀を討とうとさえした。念の為に母親に確認したところ、母親が恨めしそうな顔で残念そうに否定したので討伐騒ぎは沙汰止みになった。この話も嘘だと言う説もあるが、或る宮様がそつと日記に書き残しているらしいから真実性がある。

足利持氏は十一歳で家督を継いだから、その母親が未亡人となつたのは未だ二十代のこと、足利一族の一族の色家から嫁いで来た姫は早くから尼寺に入つたような面白くない日々を送つていた。その暮らしたに満足していた訳では無いから「庶民の娘ならば、もつと自由に髪を染めたり、牛のように耳や鼻に穴をあけて飾りをつけたり、お洒落が出来て楽しかつたのではないか？」などと空想して心をとぎめさせることもあつた。

このことは、いつしか禅秀の耳に入った。自分の主君が信じられなくなつた禅秀に追い打ちをかけたのが、石岡市民である越幡六郎に対する持氏の過酷な仕打ちである。禅秀は密かに「鎌倉公方・足利持氏を討討する会」を結成して署名運動を展開したらしいのだが、やはり主君に反逆することには躊躇（ためらい）があつた。

厳しい冬が過ぎて梅が咲き、桜の蕾は少し固いが陽ざしが柔らかな或る日、鎌倉殿中のある場所で物思いに沈んでいたところ不意に背後から「御簾中（ごれんちゆう）！と声をかけられた。驚いて振り返ると、執事の上杉禅秀がにこやかに立つていた。家来筋といつても鎌倉府の実権を握る武將なので未亡人は一歩下がって軽く会釈をしたのである。禅秀は、それを押し留めて優しく丁寧に労りの言葉をかけた。

その頃、京都の室町幕府では一つの変革期を迎えていた。第三代の將軍であつた足利義満が應永十五年に死亡し、息子の義持がやつと自分の目指す政治を行えるようになったのである。そこで一番に立場が悪くなるのは、義持の弟で、父親の蔭で寺に行かずに済んでいた義嗣である。現將軍の弟と言う立場は一人立ちした時点でプラスがマイナスに変わる…何とかしなければ…と焦るが何も出来ず、兄の無言の圧力は強くなる。

仏門に帰依して入道禅秀と号しているが上杉氏憲はエネルギーシユな男盛り、未亡人の脳裏には忘れかけていた青春時代の一シーンが映画のよう

應永二十二年、石岡市で越幡六郎が酷い目に遭わされていた頃に伊勢の国で国司が反乱を起こす

事件があった。義嗣は、この事件に呼応してクーデターを起こそうと考えていたのだが、この反乱はごく簡単に鎮圧されてしまい出番が無かった。そうした折に鎌倉にいたスパイから「越幡六郎事件」の情報が齎されたのである。

足利義嗣は自分が信頼する一人の禅僧を選び、密命を託して鎌倉へ向かわせた。鎌倉は禅寺の本場である。禅の修行に坊さんが行っても誰も怪しまない。お経の間に挟まれた密書は二人の人物に渡された。その一人は隠居中の上杉禅秀であり、もう一人は自称・関東公方・足利持氏の叔父に当る満隆（みつたか）という人物である。この人も本来は余剰人員としてお寺へ行かされる立場であったが、幸いに鎌倉府で職員募集があり就職出来たのである。小生意気な甥の持氏が、関東管領だとか鎌倉公方だとか威張りまくって自分の上に立っているから不満が無い訳ではない。

室町幕府内部から齎された密書には「將軍に不平を抱き変革を望んでいる武士団も多い」と書かれていた。その気になった足利満隆と上杉禅秀は相談して「意気投合」の返事を出した。こうして京都にいる足利義嗣と鎌倉の二人により、先ず、鎌倉公方を倒してから、軍勢を率いて都に上り、將軍・義教を倒す（足利義嗣を將軍にする）というクーデター計画が出来上がった。総大将には足利満隆が選ばれたが、満隆は高齢を理由に息子の持仲を推薦した。持仲は、彼らが倒そうとする鎌倉公方の実弟で満隆の養子になった人物である。何となく危うい計画ながら準備は進められ、軍勢の主力となる上杉禅秀は一年がかりで準備を進めることとなり味方に就く武士団を勧誘し始めた。

(つづく)

興亡の連鎖（その一）関連資料

「それ以前の主要な出来事」

延元元年（一三三六）

足利尊氏が室町幕府を開く。

延元三年（一三三八）

足利尊氏が征夷大將軍となる。

正平四年（一三四九）

室町幕府が鎌倉に「関東管領」を置く

足利尊氏の次男・基氏が初代・管領となる。

執事として畠山国清が付けられる。

正平六年（一三五二）

南北両朝廷の間に和議が結ばれる

正平七年（一三五三）

室町幕府内部の抗争、南北の和議破れる。

正平十三年（一三五八）

足利尊氏死し、義詮が二代將軍となる。

正平十六年（一三六一）

南朝軍が一時的に京都を占拠

内部抗争により畠山国清が幕府に背く。

正平十八年（一三六三）

上杉憲顕（のりあき）が鎌倉執事として越後から招かれる。これ以後、上杉氏が執事を世襲

正平二十二年（一三六七）

関東管領が二代目（足利氏満）となる。

義詮が死亡、足利氏満が三代將軍となる。

天授四年（一三七八）

足利氏満が室町に御所を造る。（室町幕府）

天授五年（一三七九）

関東管領・足利氏満が將軍への野心から謀反を企てるも、執事の上杉憲春が死を以て止める。

天授六年（一三八〇）

第二話関連※

小山朝政が南朝方で兵を挙げる。常陸から大掾詮国が兵を出す。

弘和二年（一三八二）※

小山義政が南朝方として鎌倉管領の軍と戦う。

元中二年（一三八五）※

新田軍の残党が関東で南朝方の兵を挙げる。

元中四年（一三八六）※

小山義政の遺児が兵を起こし難台山に拠る。

元中五年（一三八七）※

難台山城が落ちる。（有明の松）

常陸国が足利政権の支配下に入る。

大掾氏の没落が始まる。

元中九年（一三九二）

南北朝が合一して天皇が北朝系になる。

「應永年間の主要な出来事」

應永元年（一三九四）

足利氏満が太政大臣となり將軍職を九歳の義持に譲る。鎌倉の関東管領は十数年前に謀反を企てた足利氏満のままである。

應永四年（一三九七）

足利氏満が京都・北山に金閣を造る。

應永五年（一三九八）

幕府は、三管領、四職、七頭及び関東管領の下にある八家の家格を決める。（第二話関連）

鎌倉の足利氏満が死亡、管領は満兼になる。

應永六年（一三九九）

西国の有力守護大名である大内義弘が將軍に背き兵を起こす。鎌倉の満兼はこれに応援するため関東で軍を動員したが、執事の上杉憲定に諫められて謀反をとどまる。（應永の乱）

應永十五年（一四〇八）

前將軍・足利氏満死す。

前將軍・足利氏満死す。

前將軍・足利氏満死す。

前將軍・足利氏満死す。

前將軍・足利氏満死す。

應永十六年（一四〇九）

関東管領・足利満兼が死亡、管領職は暫く空位

應永十七年（一四一〇）

十二歳の足利持氏が関東管領となる。

應永十八年（一四一一）

上杉氏憲（禪秀）が鎌倉執事となる。

少年の管領は氏憲が気に入らない。

應永二十一年（一四一四）

北畠満雅が幕府に背き兵を起こす。

これに呼応して將軍・義持の弟（義嗣）が謀反

を企むが実行に至らず。

應永二十二年（一四一五）

この頃、常陸国越幡郷（現・石岡市小幡）の領

主で小田一族の越幡六郎信親が職務上の軽い過

ちを起こし、鎌倉の評定所に喚問される。鎌倉

管領の持氏は、被告人が管領の子分と知って自

ら評定（裁判）に割り込み「領地没収」の判定

を下す。これに抗議して上杉氏憲は「執事職

の辞表を出し、京都の足利義嗣と結んで管領の

持氏を倒す企てを練る。

應永二十三年（一四一六）

上杉禪秀の乱起こる

應永二十四年（一四一七）

上杉禪秀の乱鎮圧、関係した武将が処罰される。

應永二十五年（一四一八）

足利義嗣が禪秀の乱に関わった罪で殺される。

應永三十年（一四二三）

足利持氏が將軍職を息子の義量に譲る。

鎌倉の持氏が反発して兵を挙げようと企む。

幕府は大軍を派遣して「持氏追討」を決める。

これを知った持氏は將軍に謝罪

應永三十二年（一四二五）

將軍・義量が急死（十九歳）、鎌倉の持氏が再び

將軍への野心を抱く。

正長元年（一四二八）正月

前將軍・足利義持死す。

將軍の後継者を決める抽選会が行われる。

義持の弟である僧侶の義圓が選ばれ還俗して第

六代將軍・義宣となる。これに対して鎌倉管領

の持氏は怒り、自らを「鎌倉公方」と称して幕

府に抵抗した。このため鎌倉執事の上杉氏は「関

東管領」と呼ばれるようになった。

永享元年（一四二九）

將軍・足利義宣は「足利義教」に改めた。

將軍・義教は次第に専制君主化して人々に恐れ

られた。各地に抵抗運動（一揆）が起こる。

永享十年（一四三八）

足利義教は鎌倉公方・持氏の追討を決める。

足利尊氏の失敗

第七十四代の鳥羽天皇が即位したのは僅か五歳の

時であったから、祖父の白河天皇（上皇）が長

い期間を「院政」と称して朝廷に君臨していた。事

実上、二人の天皇が居て二つの朝廷が存在した

ようなもので、やがて「保元の乱」や「平治の乱」

に発展し、源氏と平氏が競り合う時代になる。

別に源氏だの平氏だのと言わなくても誰でも良い

訳だが集団行動が基本なので、どうしても名の知

れた指揮官の元に群れたがる。そこで武士の力が強

大化することを憂慮した鳥羽天皇は「諸国の武士た

ちが源平二氏に属するのを禁止した」と頼山陽が述

べている。しかし禁止の効果は無かったようで、平

氏が天下を取った後、源氏は旧来の服従関係で集ま

ってきた東国武将たちのお蔭で鎌倉幕府を開くこと

が出来た。

平氏討伐の旗あげは近畿地方であるが、成功した

のは東国である。その頃の関東は上野国に新田、下

野国に足利、常陸国に佐竹、大掾一族、下総国に千

葉、葛西、上総国には平良文の末裔、安房国に安西、

武蔵国に江戸、熊谷、足立、豊島、畠山、川越、佐々

木、渋谷、甲斐の国には武田の一族そして源頼朝の

近く伊豆から鎌倉近辺にかけては梶原、山内、和田、

三浦、大庭、土屋、土肥、宇佐美、伊東、天野、北

条、曾我などの武士団が居た。

それらのうちで平氏に付いた者も多かったから

頼朝は伊豆で旗揚げをしたものの石橋山の合戦で

は完敗して山中に逃げ込んだ。追いかけて来た梶

原景時が洞窟に隠れていた頼朝たちを見つけたが

ら見逃してくれたので、一行は舟で対岸の房総半

島へ逃れ大豪族の千葉氏らを頼って再起すること

が出来たのである。皮肉なことではあるが千葉氏

らの先祖は桓武平氏である。

源頼朝と先祖を同じくする足利尊氏は、平氏系の

北条氏に抑えられるのが情けなくて後醍醐天皇に味

方し、さらに独立をしたのだが室町幕府の要職を見

ると足利一族が独占している。同族でも安心出来な

いことは鎌倉幕府で勉強済みなのだが、敢てそれ

行つて、同族同士が争い合う室町幕府混乱の許をつ

くつたと思わざるを得ない。

滅亡した北条氏は基本的に一族を大切にしよう

で、源頼朝に滅ぼされた平氏もそうであった。

それは広大で肥沃な常陸国に発祥した桓武平氏の

「おおらかさ」なのであろうか：北条一族に組み込

まれたような立場にあった足利尊氏は無意識にそれ

を模倣したのかも知れない。ただ、桓武平氏にも「平

将門事件」という傷痕はある。

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(場所：石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡 2158-6

ふる里の歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ

(毎月第2土曜日 19時より)

いしおか補聴器では、ふるさと風の会、ことば座の協力で、ふるさとの歴史・文化の物語を、囲炉裏を囲むような形で、朗読に聞く「ふるさと知ろう会」を開催しております。

6月12日第8回朗読会＝打田昇三作「興亡の連鎖（その四・反乱の結末）」

7月10日第9回朗読会＝打田昇三作「興亡の連鎖（その五・難台山の難台）」

「現在の石岡市が元気が無いのは、古代の国府だったこの地に連綿と続いた豪族が六百年前の事件によって没落してしまったことに遠因があるように思えてならない。

石岡の大掾一族が滅亡へひた走る戦乱の世の物語を、打田史学に考証して行きます。

定員は10名程度となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。

朗読後、作者を囲んでのお話し会があります。

朗読会参加料金 1,000円 (コーヒーor お茶、お菓子付き)

コーヒーブレイク

『イエネコのルーツ』

菅原茂美

これまでイエネコの起源は、古代エジプトといわれていた。しかし、最近の遺伝学と考古学の新発見から、イエネコの飼育は、1万年近くも遡り、その場所はメソポタミア周辺である事が分かった。オックスフォード大学のドリスコルらは、世界中から979頭のヤマネコとイエネコのサンプルを集め、DNA解析を実施した。その結果ヤマネコは、リビア、中央アジア、南アフリカなど5つの系統に分類され、現在世界中で飼われているイエネコ(約6億匹)は、全てサウジアラビアの砂漠に棲むリビヤヤマネコ(*F. s. lybica*)の系統の末裔であることを突き止めた。故に各地に棲むヤマネコから、それぞれにイエネコへと変化していったとする説は完全に否定された。

一方考古学的には、地中海のキプロス島で、9500年前の墓に成人と一緒に子猫が埋葬されていた。1万年前の新石器時代に人類はメソポタミアで定住を始め、人家近くの鼠やゴミに、人になつきやすいリビヤヤマネコが寄ってきて、住民は飼い馴らしたものと思われる。

9000年前にイスラエル、4000年前にパキスタン、3600年前にエジプトから、更にイギリス・

ドイツ・インド・中国・日本にそれぞれ2000年前

頃にイエネコが飼われていた証拠が出ている。

更に南北アメリカはロンブス以前、オーストラリアは4000年以前に、イエネコはいなかった。

【特別寄稿】

①「私のスペイン旅行記(3)」

ギター文化館代表 木下明男

(右の原稿を頂けるものとタイトルを打ちこみ本文がメールに届くのをお待ちしていたら、『スペイン紀行はチョットお休み…ギターについてでいい?』とのこと。結構毛だらけ猫灰だらけ。どんな内容でも寄稿いただけるのは嬉しいことです)

今回は、ギター文化館所蔵のギターについて、紹介をします。

I アントニオ・デ・トーレス(1817-1922年)

トーレスは、スペイン南部にあるアルメリアの出身。12歳で大工の職に就くと、まずは木材の知識や加工技術を身につけた。本格的なギター作りは50年代に入ってから。名ギタリストであったフリアン・アルカスの影響などを受けて銘器を次々に生み出した。

セビリアにギター製作工房を構えた52年以降は、伝統的なスパニッシュギターの製作に没頭。その特徴は薄く軽くそれでいて堅牢なボディと、遠く離れたところまで届く豊かな音量とそれまでになかった音色を奏でる、現代の「コンサートギター」の原型を完成させた。

「アルハンブラ宮殿の思い出」を作曲したロマン派ギタリストのフランシスコ・タレガ(1852-1909)がトーレスのギターを愛用したこともあり、その名はタレガの名声と相まってやがて世界に知れわたった。

当館所蔵の「トーレス」は1882年製。

表面板にスプルース、横板・裏板がシープレス、マホガニーのネックに指板とブリッジがローズウッドという仕様だ。かつてはマヌエル・カーノ・タマヨ(スペインのコンサートフラメンコ・ギタリスト)が所有し、世界的なギター製作家でもあるトーレス研究の第一人者、ホセ・ルイス・ロマニリョも著書の中で紹介した。

トーレスが生涯で手掛けたギターは約320本。そのうち、現存するのはわずか80〜90本とされている。

当ギター文化館には、トーレスに大きな影響を受けたスペインのギター製作家のギターが系統的に展示されている。ホセ・ラミレス一世、マヌエル・ラミレス二世、サントス・エルナンデス、ドミンゴ・エステソ、マルセロ・バルベロ一世等々世界に名だたる銘器が数十本展示されており、その全てが演奏可能である。

II サントス・エルナンデス(1873-1942)

アントニオ・デ・トーレスは、彼以降のギター製作家に大変大きな影響を与えたが弟子をとらなかつたので、直接に製作技術を教えるということとはなかつた。トーレスの製作技法は、後年の製作家たちが夫々独自に研究をして現代に引き継いでいる。その中で最重要人物の一人がサントス・エルナンデスで、彼はマヌエル・ラミレス(1866-1916)の工房で、師匠ラミレスが亡くなる1916年まで最高の職人としてギター製作を続ける。

かの有名な「アンドレス・セゴビア」が愛用したマヌエル・ラミレスのギターは、サントスの手によって作られた事は良く知られている。そ

の後独立をして自分の工房を持ち製作を続けるが、王立音楽院の楽器の修理を手がけるなどギター製作家として最高の榮譽を得た。

彼の製作したギターを愛用したギタリストには、ラモン・モントヤ、サビーカス、レヒーノ・サインス・デ・ラ・マーサ、ニーニョ・リカルドなど錚錚たる顔ぶれが連なる。

トーレスによって作られたクラシックギターの音はサントスによって、コンサートスタイルの基礎を確立し、「これこそスペインのギター」とでもいうような、原点を強く感じさせる。サントスの特徴として誰にでもすぐにわかるのは、太くて底力のある低音で、その源流はトーレスからの流れに見られるが、サントスはとりわけ低音に特徴があり、トーレスの色彩感よりは力強さ、重厚さを重視していたと言える。重く、太いけれど、押しつけがましい耳障りな音にならず、自然な心地よい余韻がある。高音は楽器にもよるが、幾分乾いた感じの、甘さを少し抑えた音色で、べたつかず、芯のある音です。しかし、硬いというのではなく、どこか木肌を思わせるような、なつかしい温かみがある。

来月号には「スペイン旅行記3」を書きます。本年下半期の御案内が刷り上がりました。楽しいメニユー満載です。ぜひお運びください。

②「四六のガマ」のことなど

鈴木 健

昔の同僚から十数年ぶりに便りがとどいた。「筑

波山名物ガマの油売り」の口上士の資格をとったので、八月一日に筑波山神社の境内で「サアサアお立ち合い・・・」をやるとのこと。私の楽しみがふえたが、その前に今回はその四六のガマを探りあげて恥を曝してみようという気になった。

さて、お立ち合い。子どもの人気者のカエルは、「カエルの夜回り」、「カエルの子守唄」、カエルの合唱」などよく歌にも唄われたが、なんと言ってもユニークなのが、永六輔作詞、いずみたく作曲の「筑波山麓混声合唱団」。「合唱団」と名がついていても合唱団の名前ではなく曲名だ。「混声合唱」とは言ってもデュークエイセスのれつきとした男声四重唱であり、それでいてアルトもソプラノも入った混声四重唱をこなす。「つくばさんらく合唱団だん」マウントつくばのフロッグコーラス コンダクターはガマがえる ガマはガマでも四六のがまー」。後半は輪唱にかわる。ふつうの輪唱は同じメロディーを追いかけるので、四人ならば四声輪唱となるが、ここでは混声四部輪唱となる。だからカエルの鳴き声のにぎやかなこと。

登場する蛙はテナーのアマガエル、バスのマガエル、ソプラノはカジカ、アルトはトノサマガエル。ただし、実際に田んぼで鳴いているのは、デュークと同じオスだけの男声。しかも鳴くTPOを異にするので彼ら全員と一緒に合唱することはない。またトノサマは江戸へはもちろん箱根を越えて関東平野に入ることはできず、そのかわりメタボ殿様の東京ダルマガエルがはばをきかしている。だが、楽しく歌えればよく、そんな細かいことを言うとは嫌われる。

嫌われたついでに言ってしまうと、本州のなかでモリアオガエルがいないのは茨城だけ。そのか

わりよそにはいない四六のガマがいることになっている。私の友人で某国立大学の教授をした男が、四六を見つければ筑波山中に踏み入ったが、沢のほとりで帰らぬ人となってしまった。

新商品の売り込みには四六、五六、四五、五五、なんでもよい。「ガマの油」の口上も、「口上士」の資格試験のアイデアも、それを主宰する「口上保存会」の会報が「四六ジタイムス」であることも、楽しい。「セリフを覚えるのはたいへんでしょう」「いや四六時中暗誦しましたよ」。このように自由な発想が生まれ生かされる仲間は発展間違いなし。

ところで、ほかの国の蛙はどんなに鳴くのだろうと気になり、思い出したのが、輪唱曲の「カエルの合唱」。これはもともとドイツの曲で、「クワツ クワツ クワツ ケケケケケケケ クワツ クワツ クワツ」のところは、ドイツでも日本と同じ発音なので妙に感心した記憶があった。

昔の様子はどうだったか。「蝦蟇二万ばかり」難波の市の西の道より南の汚地に列ること三町ばかり」(『続日本紀』七八四年五月)。渋滞通過に一時間。昭和の中村汀女さんも「暮あくる到り着く辺のあるごとく」と詠んでいるが、目的地は「かがい」のために集まる古池であった。やつとたどりつくや、休む間もなく雄同士の「蛙合戦」に巻き込まれる。一茶が「蛙たたかひに見まかる。四月二十日也けり」として「瘦蛙まけるな一茶是に有り」という句を残したのは殿様蛙のそれであったかもしれない。ガマはどんなに渋滞しても前を見てあるいているから道を道を見失うことはない。ところが、立ち上がったらどうなるか。目は後ろ向きになり前を見ることができなくなる。前者の肩に

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を
自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で・・・また大好きな雑木林に一滴の土を分けてもらい、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。
オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel.0299-55-4411

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。
営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00
月・木曜日が定休日です。

電話 0299 - 43 - 6888

つかまりながら、リーダーの怒鳴り声にしたがつて歩くほかはない。それを「蛙の行列」という。数十年前、日本中でそれを強制されたが、その経験は無駄に思っていないように思っている。

【風の談笑室】

最近の当会には嬉しいことが連続して起り、会員にとって一層の励みとなっている。まずは最初にこの話から。

審書房の太田さんから電話が入り、「原稿の締め切りは何時？ 風の談笑室に投稿したいのだが」と言われた。

ゲストの特別寄稿に掲載すべきなのであるが、談笑室に、とのお電話だったので、敢えてこのコーナーに紹介します。

「長屋殿下」の指摘

太田尚一

「ふるさと『風』」への投稿が縁で以後毎月届けていただいで居り、毎月欠かさず石岡に吹く風を信じられないこちながらその現実に浴して居ります。

先の第四七号（四月）の、【風の談笑室】欄、打田昇三氏の『長屋王』の論議「興味深く読ませていただきました。情報を提供したものの打田氏には審書房出版の雑誌を結果的に買わせてしまうことになったことで大変恐縮いたしました。」

志田諄一先生の『長屋王』の木簡をめぐっての一文は、かつて志田先生の常陽藝文における歴史講座で『常陸国風土記』と『日本霊異記』をそれぞれ二年間づつ聴講していた当時ご寄稿いただいたもので、これを大新聞とテレビがとりあげてくれたことで全国的に耳目を惹いた志田史学の一つの成果であったのです。当時長屋王邸宅跡より発掘発見された木簡の「長屋親王」が注目話題であったことと相まつての文献史学の成果ということとです。

ところで、『日本霊異記』にある「太政大臣正二位長屋親王」は古代史や中世史の研究者なら比較的知られていたことであつたと思われることですが、志田史学最大の勲は「長屋親王」との記述に加えて、文武天皇を悼み和同五（七一）年に完了した写経の跋語に記されている「長屋殿下」を指摘したことにあるのです。

志田先生によれば、養老二（七一八）年編纂が開始された『養老令』の儀制令に、

三后（太皇太后・皇太后・皇后）・皇太子に於きて上啓せむときは殿下と称せよ。とあるのです。

つまり、「長屋殿下」とあるのは長屋王が皇太子もしくは皇太子に準ずる地位にあつたことを物語っている、というものです。

従つてこうした文献史学の立場を、発掘された木簡「長屋親王」の出土は、考古学的に確認された画期的な発見ということになったのです。

太田さんには、何時も有難いアドバイスや資料をご提供頂き、大いに感謝をいたしております。特に、石岡の歴史ご案内を一年半にわたつて掲載して来た兼平さんには、「ウツを書いてはいけませんよ」のお言葉で、石岡市史の偏つた見方を指摘・訂正されて大いに勉強させられる。

ワーツ、また太田さんから電話を頂いてしまいました。と兼平さんは、嬉しくも戦々恐々としてます。そして、打田さんにいろいろ質問をし、

打田さんはまたその都度丁寧に資料整理をした文章を会員に渡してくれます。

太田さんのおかげで、毎月の定例会には話題が尽きることはない。

先月号に、鈴木健さんより投稿を頂き、皆で大喜びしたのであつたが、鈴木さんからは今月も投稿頂いた。この分だと、鈴木さんからは毎月投稿頂けるのではないかと、編集事務局としては大いに期待している。

木村さんのご支援で、HPを立ち上げて頂いたのですが、先日、「打田昇三さんは、私の存知あがる打田さんではないでしょうか？」というメールが、HPを経由して私のところに入った。

『20年ほど前に御殿場在住の故KMさんから「平将門」（作詩・打田昇三）を頂戴し、添付の歌を作らせて頂きました。お聴き頂き、私の思う「打田昇三さん」でありましたら、コンタクトしたいのですが・・・』というもので、早速打田さんに確認したところ、確かに私です、との事で、その方に打田さんの連絡先をお知らせした。

HPを持つという事は、こうした新しい関係をつくり出していく事なのだ、と時代遅れになりかけている自分を反省させられた。

聾者の小林さんとコミュニケーションするのに、携帯メールの文明の利器を痛感させられ、またまたHPに新たな広がりを与えられてヒヤーツと感動している。

そう言えば、今月から、兼平さんが原稿をパソコンに打ちメールに送ってくれるようになった。編集を担当する者にとっては大助かりである。

年々体力は低下してくるのだから、便利な利器は大いに活用すべきである。覚えることが増えては来るが、確かにボケ防止には効果的であろうと思う。

ところで今日、ことば座の公演を二週間後に控え、兼平さん、小林さんと村上龍神山に登ってきた。台本を書く前に、小林さんとは登ってきたのであるが、もう一度舞のイメージを固めるためと、兼平さんの背景画のイメージを固めるために出掛けて来たのであった。

今回の公演は「透明な青の色は龍の流した涙の色」と題して、書き下ろしたのであったが、その物語を考える動機となったのが、龍神山の探石場の隅の方にある池であった。その池は、村上龍神山の頂上に登らなければ見ることが叶わないのであるが、その湖水は、空の青を吸い取り塗籠めたのではないかと思われる程、澄んだ綺麗な青の色なのである。

風語り

草風亭雨露

そこに清らかな流れを見たら、その流れに身を
あずけるしかないだろう。

流れをただ眺めていても、何も起ることはない。
だったらその流れにすべてをあずけよう。

もしそこに良質の女性がいたら恋をして
その丸い腰を抱けばいい。

・ 振り返れば道は一本

・ この先見れば道のあちこちに分かれており

・ 陽だまりに猫の丸まってねておる

・ 風に戯れて景に心しずめて

風が夏を呼んだら、軒先にスズメ蜂が巣を
始めた。かわいそうだがジェット噴射の殺虫剤で
退治した。この夏は猛暑か冷夏か。

普段の私の行いがいけないのだろうか、兼平さんも小林さんも私が嘘八百を並べてねつ造しているかのように思っておられる様である。

小林さんとは、脚本を書く前に登って一緒に青の池を見ている筈なのに、神社の脇の御手洗の湧き水と思い込み、兼平さんは脚本を読んでこれは柏原池の事と思い込んでいたのであった。私が勝手なねつ造物語を作ると思っているものだから、頂上から見下ろすと探石場の隅に綺麗な池があるんですよ、という話しを聞いていないのである。小林君に至っては、一緒に眺めた筈なのに、覚えていないのである。

それで、今日初めて見たというのである。そして、もつと綺麗な舞いイメージしよう、と言いつつ始末である。やれやれ、小生も救いの少ない男である。

で、水から救われようというわけではないが、
終り近くの舞歌の一節を紹介してみたいと思う。

・・・・・・・・・・・・・・・・

風子。

今、お前は私の最後に流した涙の色を

「透明な青の色」と心に呟いてくれた。

許しておくれ。

私は、もう天に昇り龍になることは叶わない。

だが、私の涙を透明な青の色と詠ってくれた

風子の言葉には

永遠の物語が記されてある。

風子。

言葉は心の真実を語るものだけれど

美しい分だけガラスのように

脆く壊れやすいものだ。

だから風子。

言葉を常世の風にのせて舞っておくれ。

風子の舞の言葉の物語は

きつと明日の希望に生まれるのだから。

・・・・・・・・・・・・・・・・

今回の公演での小林幸枝の舞は、手話を太極拳のようにゆっくりと大河の流れのように一か所に留まることのない様な流れを作って舞いなきい、と指示してある。

演出家としての私としては、指示通りにイメージし、淀みなく舞いながら、流れの景を表現してくれたら、一皮むけた新しい小林幸枝の朗読舞が完成するだろうと思っている。新しい小林の舞に、野口喜広さんがどんな土笛（オカリナ）の風の香りを漂わせてくれるか非常に楽しみである。

また、今回の公演から、ことば座研究生の兼平良雄さんが、生涯学習として「平家物語」全段の朗読語りに挑戦します。

6月18日〜20日の公演日には、10時から14時まで「風の会展」を行っています。お時間のある方、ぜひお越しただけたらと思っております。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com>

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか
ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および
朗読舞俳優志望者を募集しております。

研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂
き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

◎募集要項

募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース

募集人員：6名程度（最大10名まで）

※面接及び朗読と簡単な演技表現試験有り

養成期間：1年間（入塾は随時受付ています）

指導月4回

受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）

※詳しくは、下記ことば座事務局までお問い合わせください。

舞台衣装等のデザイン・製作に興味があり、ことば座にボランティア参加して頂ける人、募集しております。

現在舞台背景画担当として風のことば絵作家の兼平ちえこさん、舞台装美として小林一男さんの参加を頂いております。

興味のある方、事務局の白井まで連絡下さい。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp

詩を手話の舞に楽しむ「朗読舞教室」受講生募集中!!

ふる里に生まれた詩歌を朗読舞に楽しんでみませんか。

ことば座は、物語の朗読を手話を基軸とした舞(朗読舞)に表現する劇団で、朗読舞を演じる小林幸枝は、世界でただ一人の朗読舞俳優です。

教室は、第二、第四土曜日午後2時からを予定しております。

受講料は、月額3,000円です。(教室は、国府公民館そばの、ことば座稽古場)

(講師：小林幸枝 白井啓治)

詳しくは、下記ことば座事務局までお問い合わせください。

ことば座事務局(白井) ☎0299-24-2063

ギター文化館発：ことば座第18回公演

6月18日～6月20日（18、19日15：30開演、20日14：30開演）

常世の国の恋物語第25話

透明な青の色は龍の流した涙の色

（入場料 3000円 ギター文化館&いしおか補聴器にて取り扱っております）

龍の棲むというこの山に登って来て、この国を見下ろしてみた。

誰にも一度の恋の思い出は持っているものである。

しかし、龍が棲むというこの村上の山の頂上からこの国を見下ろしたとき、何故か思ってしまった。

『この国に、かつて青春はあったのだろうか？ あったのだったらどんな青春だったのだろうか？

本気に恋をした者たちが居たのだろうか？』と。

風子。

言葉は心の真実を語るものだけれど、

美しい分だけガラスのように非常に脆く

壊れやすいものだ。

＝ ＝ ＝ ＝ ＝
|| 脚本・演出 白井啓治 ||
" 音 楽 野口 喜広 " ||
|| (オカリナアート JOY) ||
" 舞台背景画 兼平ちえこ " ||
" 舞台装美 小林 一男 " ||
|| 朗 読 しらみひろぢ " ||
" 朗読舞 小林 幸枝 " ||
＝ ＝ ＝ ＝ ＝

だから風子。言葉を常世の風にのせて舞っておくれ。

風子の舞の言葉の物語は、きっと明日の希望に生まれるのだから。

生涯学習として平家物語全段：百二十句の朗読に挑戦する兼平良雄。

第一朗読会「第一句：殿上の闇討ち」同時公演。

ふるさと風の会展同時開催

6月18・19日（10時～15時）20日（10時～14時）入場無料

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150